

歴史は繰り返すか

(通貨発行益を巡る攻防)

.....社会の存続基盤を転覆するうえで、通貨を墮落させること以上に巧妙で確実な方法はない(ケインズ).....

シニョレッジという言葉がある。本々「君主であること」を意味する言葉であったが、後世転じて「貨幣発行者が貨幣の発行によって手に入れる利益」を意味するようになった。意味が転じた背景には、貨幣発行権を有する君主がそれを行使することによって莫大な利益を手にしてきたという歴史的事実があった。そうなのだ、貨幣はその発行に必ず利益が伴う。そして貨幣発行者は、いつの時代もその利益を懐に入れてきた。

昔、歴史の授業で出てきた江戸時代の貨幣変遷を覚えている方も多いと思う。江戸徳川幕府も、長く政権を維持する中で、幾度か「改革」と称して大判小判に含める金の含有量を落とす貨幣悪鑄を行った。何故と云えば、悪化する幕府財政を建て直すため「貨幣発行益」(シニョレッジ)を手に入れたかったのである。逆に云えば、巨額のシニョレッジを手にするによって当面の財政危機を乗り切った。そして、そのツケは「下々」に回された。

これは何も江戸時代に限った話ではない。古今東西、貨幣鑄造権を握った権力者で通貨悪鑄に手を染めなかった者はむしろ少ない。権力者は皆、この魅力に取りつかれシニョレッジを手に入れようとした。

翻って現代、江戸時代と違って今は紙幣が貨幣の主体となっている。しかし基本は今だって同じである。確実に言えることは、シニョレッジを手に入れる方法はより簡単になった。誰もが直ぐ解るように、紙幣は紙を大量に印刷すればよい。大量に印刷した紙幣をばら撒けば、それで巨額のシニョレッジを手に入れることができる。

普段使っている1万円札。この発行コストは20円弱である(と記憶している)。たった20円で1万円を手にするのが通貨発行権を持つ日銀である。その意味で、日銀は合法的に、しかも簡単にシニョレッジを手に入れることのできる立場にある銀行なのである。

ところで、1万円が1万円として流通するのは、それが1万円の価値を持つと誰もが信じているからである。日銀の信用が維持されているからに他ならない。しかし、若し日銀がシニョレッジの誘惑に負け1万円札をドンドン印刷してばら撒けばどういふ事が起こるだろうか。

先ず日銀の信用が失墜する。そして、円という通貨が下落し始める。昨日1万円で購入した物が今日は2万円となり、明日は4万円となりかねない世界が出現する。いわゆる超(ハイパー)インフレである。馬鹿げたことと思われるかもしれないが、近年ではロシアや南米でこれに近いことが起こっている。「20円を1万円にする」誘惑はそれほど強いと思って間違いない。

日銀は政府から独立し、通貨発行権を持つ銀行は、銀行の中の銀行である日銀に限る。これは人類が失敗の歴史(シニョレッジの誘惑に勝てない人間の弱さ)を教訓としてできあがった制度である(と私は理解する)。その日銀に危機が迫っていると云えば大袈裟か。昨今、議論姦しいインフレ・ターゲット論の陰にはシニョレッジへの断ち難い誘惑が潜んでいるように感じるのだ。

財政難にある政府も、政府を支える深窓の理論家達も、デフレ脱却を合言葉に更なる紙幣の発行を日銀に求めている。

だが日銀は、何の裏付けもなく紙を印刷してばら撒くことはできない。紙幣は日銀の債務だから、債務を増やすには資産を増やさなくてはならない。だから、国債という資産、株式という資産、不動産(投信)という資産を増やす(取得する)。その対価として紙幣(負債)を発行する。そうして手にしたシニョレッジを巧妙に政府に移転する。来年4月の新札発行にもそんな匂いを感じてしまうのは私だけではないだろう。

デフレは貨幣的現象だから日銀の金融政策で変えられると豪語する人もいるが、今正に起ころうとしていることは「シニョレッジを巡る攻防」のように思うのだ。米国を遙か後に置き、数年の内に歴史上類例を見ない規模に膨れ上がろうとしている政府債務を消すにはシニョレッジしかない。歴史を振り返ればそう考える権力者が出てきたとしても不思議ではない。

しかしその時、冒頭の言葉のように社会の存続基盤は崩壊し、昔と同様「下々」に混乱と苦難が待ちうけている。